本郷上口遺跡

NTTドコモ広瀬本郷基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年2月

株式会社NTTドコモ中国支社 安 来 市 教 育 委 員 会

本郷上口遺跡

NTTドコモ広瀬本郷基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年2月

株式会社NTTドコモ中国支社 安 来 市 教 育 委 員 会

例 言

- 1. 本書は携帯電話基地局・広瀬本郷基地局建設に伴い、NTTドコモ中国支社の委託を受け、安 来市教育委員会が平成23年度に実施した本郷上口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 調査主体は次のとおりである。

[調査主体] 安来市教育委員会

「事務局〕

安来市教育委員会教育長 伊達山興嗣 安来市教育委員会教育次長 平井 禎 安来市教育委員会文化課課長 原田 誠 安来市教育委員会文化課主幹 水口 晶郎 安来市教育委員会文化課主幹 舟木 聡 安来市教育委員会文化課主任 坂根 丈

「調査員】

大塚 充 (安来市教育委員会文化課主幹) 泉あかね (同 臨時職員)

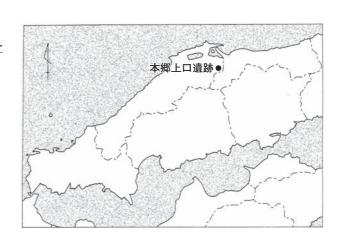
[調査指導]

池淵俊一(島根県教育庁文化財課)

[調査参加者]

細田章郎、実重勝利、山口スミエ、細井重美

- 3. 本書の実測図は、大塚、泉が作成し、泉が浄書を行った。
- 4. 本書に使用した遺構及び遺物写真は大塚が撮影した。
- 5. 本書の編集執筆は大塚及び泉が行った。
- 6. 本書に掲載した遺構・遺物実測図及び写真は安来市教育委員会で保管している。



本文目次

I-ray	-	_
1/5	ľΞ	=
レリ		⊐

第1章	調査に至る総	経緯と経過	1
第2章	位置と環境		3
第3章	調査の概要		5
第4章	まとめ		10

挿 図 目 次

位置図

第1図	調査区位置図(1/5000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2図	調査区配置図	2
第3図	周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
第4図	調査後測量図(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
第5図	出土遺物出土状況実測図(1/10)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
第6図	調査区セクション実測図(1/60)	7
第7図	遺物出土位置図(1/80)	8
第8図	出土遺物実測図(1/3)	9

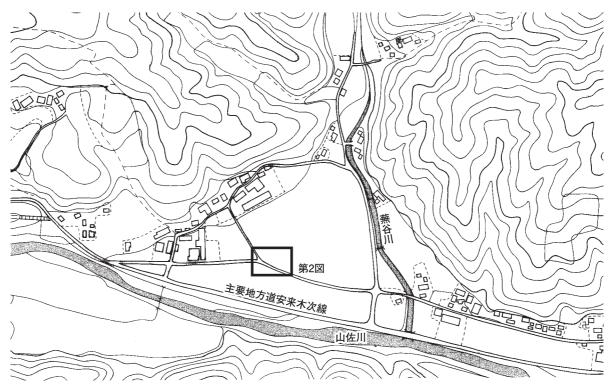
第1章 調査に至る経緯と経過

平成22年2月にNTTドコモ中国支社より提出された、携帯電話基地局である広瀬福頼西基地局建設に伴う分布調査依頼を受け、安来市教育委員会は建設予定地での分布調査を行った。周知の遺跡は所在しないものの周辺地形や周辺に周知の遺跡として本郷上口遺跡が所在することなどから試掘調査が必要であるとの回答を行った。その後、5月7日から現地での試掘調査を行った。試掘調査の結果、溝状の遺構とその遺構面直上から完形の遺物が検出された。遺物は溝状遺構に沿う形で検出されており、何らかの関連性も想像できるものだった。

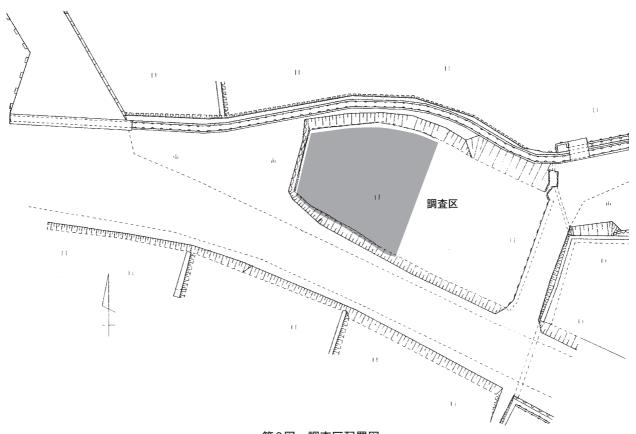
以上のようなことから、建設予定地には遺跡が所在するものと判断し、工事開始に際し本調査が必要である旨の回答をNTTドコモ中国支社に行い、発掘調査にむけての協議を開始した。また、この遺跡は隣接する周知の遺跡である本郷上口遺跡との関連もしくは一体である可能性が考えられたため、本郷上口遺跡として調査を行うこととした。

本調査については携帯電話無線基地局の計画範囲約60㎡を調査範囲とし、平成22年11月25日から本調査を開始した。調査区は休耕田となっており、雑種地のような状況であった。旧耕作面を除去すると黄色の真砂土層が現れこの部分は耕作に伴ういわゆる床土と考えた。その床土部分を除去すると遺構面が現れこの面を精査した。試掘調査段階で、調査区の南側は河床レキが広がることが予想されたが、本調査の段階ではレキは見られるものの面的な広がりはなく、結果的に遺構面の下には河床レキの層があることが分かり、この露出であることが分かった。

試掘調査の段階で遺構面はかなりしっかりした地盤の上にあり周辺には、ピット等の検出が予想



第1図 調査区位置図 (1/5000)



第2図 調査区配置図

された。また、遺物・遺構の検出もあったことから、これらに関連するものの検出があるものと考 えた。遺構については試掘調査時の溝状遺構の広がりが確認でき、また、東側に並行する形でさら に1条の溝状遺構の確認もできた。そのほか、調査区の北端には石の集積が見られ、遺構の可能性 を考えながら調査を進めたが明確な遺構ではなく基盤層となっている河床レキの露出であることが 確認できた。遺物については、耕作土層やその下層のいわゆる工作に伴う床土の中から土器片の検 出はできたものの試掘調査時に見られたような完形に近い、遺構面直上に検出される遺物は何点か の小片で推移した。しかし、その後の遺構面の精査の中で9個体がまとまった形で遺物の集積を検 出できた。検出時にはほぼ完形の固体が集積していることが確認でき、人為的に据えられた印象を 受けたことから、埋納痕等の遺構の検出を試みたが結果的にはこの遺物に伴う遺構は検出できず、 遺構面直上に置かれたものであると判断した。引き続きピット等の検出の可能性を持ちながら調査 区内の精査を行ったが最終的には、これらの遺物と2条の溝状遺構の検出にとどまることとなった。 その後、調査指導により一部露出したレキ層の下に土石流により埋まった遺構面の可能性が考え られることから、サブトレンチによる確認作業を行った。レキ層の下は砂層となっており遺構面を 確認することはできなかったが、この場所が河原からレキの堆積があり、その上に遺構面があると いう成り立ちを確認できた。また、この調査指導の際にレキ層の中に黒色の炭のような堆積があり 焼土層と考えていたが、この層は焼土ではなく耕作土中のマンガンが沈殿したものであるという指 摘も受けた。遺構面全体が黒っぽくなっていることもこのマンガンによるもので焼土ではないこと も判明した。その後セクション等の記録作業、写真撮影等を行い、平成22年12月17日に現地での 調査を完了した。

第2章 位置と環境

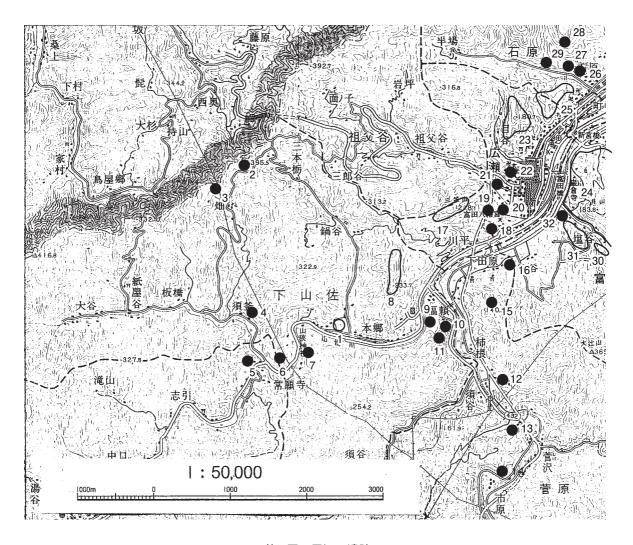
本郷上口遺跡が所在する、安来市広瀬町は島根県の東端に位置する安来市の南東部にあたり、飯梨川の上流部が形成する谷部に位置する。この上流部は布部から比田につながる谷と山佐から奥田原につながる谷に分岐しておりそれぞれ、奥出雲町と雲南市に境を接している。またこの上流部には、それぞれ布部ダムと山佐ダムがあり島根県東部の水がめとなっている。本遺跡の所在する場所は山佐側の谷の最下流部付近で谷が大きく開け集落が形成されている部分に当たる。通称・山佐川に蕪谷川の合流する地点で平坦地が広がる部分である。周知の遺跡として本郷上口遺跡がすでに所在しており、本調査もこの遺跡の一部という取り扱いの中で行った。本郷上口遺跡は散布地として須恵器等の検出があり、古くからこの地域が人々の生活基盤となっていたことを示すものである。この遺跡をはじめ周囲には古代の遺跡は多くないが、土居成遺跡から縄文時代の遺構や遺物を検出している。また、古墳や横穴墓などの古墳時代から奈良時代にかけての遺跡も周辺には点在している。

奈良時代以降の遺跡は多くは知られていないが、中世に入るとこの地域が出雲国支配の中心地となったことから、城館跡や都市遺構が見られるようになる。このうち、月山富田城跡はこの代表とも言えるもので、標高190mの月山山頂を中心とした大規模な山城跡である。月山とその周辺の丘陵上には大小無数の郭が存在し、主要な郭の周りには石垣が築かれている。昭和50年代から史跡整備に伴う主要な郭の発掘調査が行われ、多くの遺構・遺物が発掘されている。この城は、中国屈指の戦国大名であった尼子氏の居城として有名で尼子氏滅亡後は毛利氏、吉川氏と城主が代わり関ヶ原の戦功により堀尾氏が入城したが、堀尾氏が松江城を築いて本拠を移したことから廃城となった。尼子氏最末期にはこの地で、毛利氏との月山富田城をめぐる大きな攻防戦があったことなどから大小数多くの城跡が所在している。大きな丘陵上の頂部や山腹には郭や堀切などを設けながら城砦化した跡を現在でも見ることができる。代表的なものとしては、尼子軍の中核を担っていた新宮党の居館跡と伝わる新宮党館跡、大内氏や毛利氏が月山攻略の拠点とした京羅木山城砦群や勝山城跡などの陣城群、空堀を伴う城館跡が確認された土居成遺跡などである。

また、江戸時代の寛文6年(1666年)飯梨川の氾濫により壊滅した富田城下町の遺跡である富田川河床遺跡が著名である。現在の飯梨川の流路の中にあり河川改修に伴う発掘調査により発見された。数多くの遺物・遺構が発見されており、当時の町並みや人々の生活を現在に伝える遺跡となっている。

その後、江戸期以降は松江藩の支藩として広瀬藩が置かれることとなる。氾濫により流路を変えた飯梨川を挟んだ東側、現在の安来市役所安来庁舎の付近に藩邸が設けられる。現在の広瀬町中心部は江戸期のこの町並みが基本となっており、当時の城下町の風情を残す町並みとなっている。

その他、本遺跡の周辺には塩谷焼窯跡や八幡焼窯跡などの窯跡や福頼鈩跡や菅沢鈩跡などの製鉄 遺跡を見ることができる。窯業は、現在も何箇所か操業を行う窯があるほどこの地域では一般的な ものであるし、製鉄遺跡は中国山地でのたたら製鉄との関係が色濃く、奥出雲町や雲南市と地勢的 に近いこの地区のひとつの特徴ということができよう。



第3図 周辺の遺跡

	名 称	種 別	概要		名 称	種 別	概要
1	本郷上口遺跡			17	三笠山城跡	城 跡	郭、带郭、腰郭、堀切
2	畑要害山城跡	城 跡	郭、带郭	18	八幡焼窯跡	窯 跡	
3	キブタシ遺跡	散布地	石鏃	19	伽羅久利神社遺跡	散布地	
4	須釜遺跡	散布地	縄文土器、石鏃、石釜	20	上広瀬遺跡	集 落 跡	竪穴住居
5	常願寺遺跡	散布地	縄文土器	21	祖父谷口石塔群	古 墓	五輪塔、宝筐印塔
6	本郷上口横穴群	横穴墓	刀子、須恵器、人骨	22	広瀬藩邸跡	城館跡	礎石、建物跡、瓦
7	権現山神宮寺跡	寺 院 跡		23	大成山城砦跡群	城 跡	郭、土塁
8	経塚山城砦跡群	城 跡	郭	24	月山富田城跡	城 跡	山城、国指定史跡
9	福頼古墳群	古墳	方墳2基	25	亀井ヶ成・誓願寺 裏城砦群	城 跡	带郭、土塁
10	福頼鈩跡	製鉄遺跡	樋、鉄滓	26	石原城跡	城 跡	郭
11	福頼城跡	城 跡	山城、陶磁器	27	下石原廻の谷古墳	古 墳	
12	才の神焼窯跡	窯跡		28	下石原廻の谷横穴	横穴	
13	越峠焼窯跡	窯 跡		29	石原古墳	古 墳	円墳
14	菅沢鈩跡	製鉄遺跡	鉄滓、炉壁	30	日向丸城跡	城 跡	郭
15	寺山城跡	城 跡	郭、腰郭、竪堀、虎口	31	明星寺塩谷城館跡群	城館跡	带郭、土塁、虎口、 櫓台
16	土居成遺跡	城館跡	建物跡、堀切、陶 磁器	32	塩谷焼窯跡	窯 跡	

第3章 調査の概要

1. 遺 構(第4図~第5図・第7図)

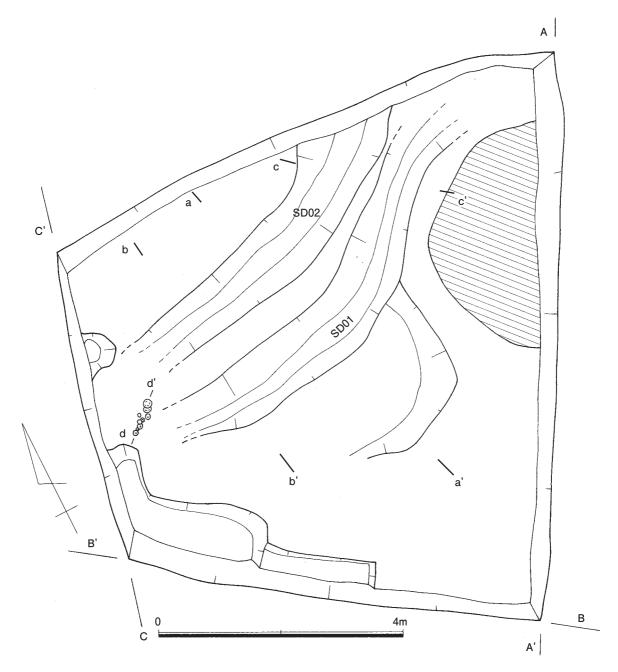
調査区は、休耕田となっており、約20cmの厚さの耕作土とそれに伴う床土を除去した部分が遺構面となっており、全面に黒色の比較的しまった層として検出できた。調査区の北側と溝状遺構SD01の南端部分からはこぶし大〜人頭大のレキの集積が見られた。特に北側から検出できたレキの集積は、集石遺構の可能性も考え精査を行った。しかし、精査を進めるうち、レキの配置に人為的な意図が感じられず、大きなくぼみにレキを投げ込んだように集まっていることが分かった。このためサブトレンチを設定し、このレキの集積部分に立ち割を入れ確認を行った。このレキは遺構面として検出した層の下側に潜り込むように続いており、調査区北側セクションの精査から、床土層の部分にもレキ層が入っていることから圃場整備もしくは耕作に伴う各欄である可能性が高いものと判断した。また、遺物の検出も見られなかったことから遺構ではないものと考えた。

SD01の南端部分のレキについても遺構面の下に入り込んだレキ層で、遺構面の掘りすぎによる部分的なレキ層の露出であると考えた。レキの間には黒色のマンガンの沈殿が見られ当初は、焦土痕であるかのような印象を受けた。このマンガンの沈殿が遺構面全体に見られ、黒色の表面と固く締まった層はこのためによるものであることが分かった。この黒色の層を追いかけながら、遺構面の検出を行ったため、部分的に遺構面を掘りとばしその下のレキ層を露出したものであり、この部分が集石遺構などの性格を持つものではないと判断した。遺構面は、河床レキが徐々に埋まった部分に立地しているものと考えられ、河床から陸地化した部分に立地していることがサブトレンチなどの最終的な精査により明かとなった。レキ層を除去した部分に遺構面の所在する可能性も考えらたため、レキ層のなくなる部分までサブトレンチによる掘削を行った。レキ層の下は青灰色の砂層が見られ、この部分は河床もしくは河原のような山佐川の旧流路の上に立地していることが確認できたため、これ以下に遺構面は所在しないと判断し、ここで掘削を終了した。

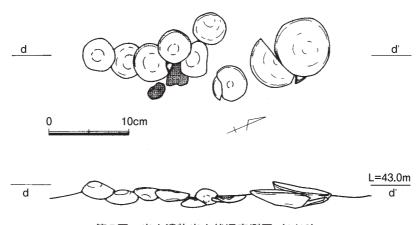
今回の調査区には、SD01 と SD02 の 2 つの溝状遺構を見ることが出来た、このため調査区全体が、 波状にうねった地形を呈している。試掘調査時の所見から、溝状遺構の周辺には住居等の遺構の検 出の可能性も考えながら調査を進めたが、住居もしくは建造物に繋がるようなピット等の検出はなかった。一部、耕作時の堀込みと考えられるピット状の穴を見ることが出来たが、形が不整形で埋土が明らかに床土層と同様なため構成の削平によるものであった。ただし、溝状遺構の周辺からは 試掘調査時も含め遺構面直上からまとまった遺物の検出が見られ、またその検出状況も流れ込みや 廃棄といった形ではなく、地面に据えるような形で検出できたことから何かしらの意図を持っておいていると考えられた。このため、この場所周辺には生活の営みがあったものと考えられる。今回 の調査では、範囲が狭く全容を解明することが出来なかったが、遺物を含めこの地区の生活の歴史を物語るものとなった。以下、遺構ごとに状況をまとめてみることとする。

SD01

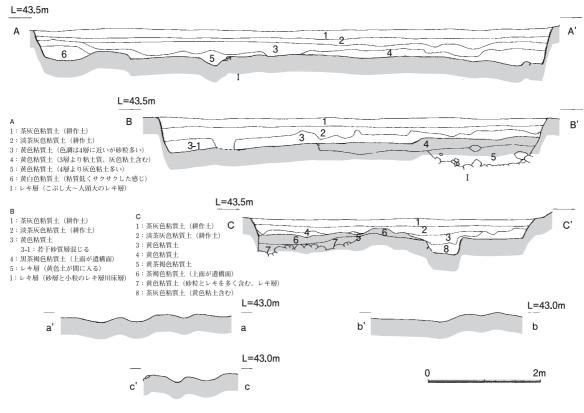
調査区を南北に横切るように走る溝状遺構である。最大幅は、0.6m、深さは最大で 0.2m ほどで



第4図 調査後測量図 (1/60)



第5図 出土遺物出土状況実測図 (1/10)



第6図 調査区セクション実測図 (1/60)

あるが、浅い部分はほぼ平らな状況である。前述のとおり、南端の部分はレキが露出しているが、遺構面を掘りとばしたことによるものであり、検出面よりやや高い部分に所在すると考えられる。南側から北側に向かってなだらかに傾斜しており溝の中心部で比高差0.3mほどである。性格ははっきりせず、また極端に浅い部分もあり後世削平を受けた可能性も考えられる。平行するSD02との切り合い関係はなく同時にこの部分に所在していたものと考えられる。調査区北端では若干北西側に歪曲しており、直線的ではなく蛇行する形での形状を呈している。

SD02

SD01 に平行するように走る溝状遺構。調査区の東端の部分で大きく落ち込んでおり、深さもこの部分が大きくなっている。最大幅0.7m、深さ最大0.2m ほどである。SD01 同様に性格は不明である。この2つの溝状遺構が平行していることが人為的なものなのか、流路などの自然の作用によるものなのかは判然としないが、形状や遺物の出土がこの遺構周辺に見られることから人為的なものである可能性が高いように考えられるが、周辺にピット等の付随する遺構が見られないことなどからここでは断定を避けておきたいと思う。

遺物出土状況(第6図)

SD01 に沿った形で、遺物の出土が確認できた。試掘調査時も含めると、14個体程度が遺構面直上から検出された。検出状況はいずれも良好で特に本調査時に検出できたものは、ほぼ完形の状態で検出できた。遺構面に据える形で置かれており、何らかの意図を持ってこの場所におかれた印象

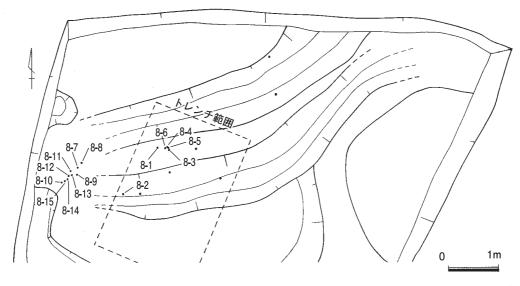
を受けた。しかし、埋納もしくは設置のための遺構は伴わず無造作に遺構面に据えられている。溝 状遺構 SD01 にそった中での検出のためこの遺構との関係も考えられるが、現段階ではなんとも判 断がつかない。儀礼的な目的なのか、日常生活の中での目的なのか、出土状況だけではなんとも言 えず出土状況を記すにとどめたいと思うが、溝状遺構と出土遺物の関係があるとするならばどう いった目的を持っておかれたのか包括的な判断が必要になると考えられる。

遺物 (第8図)

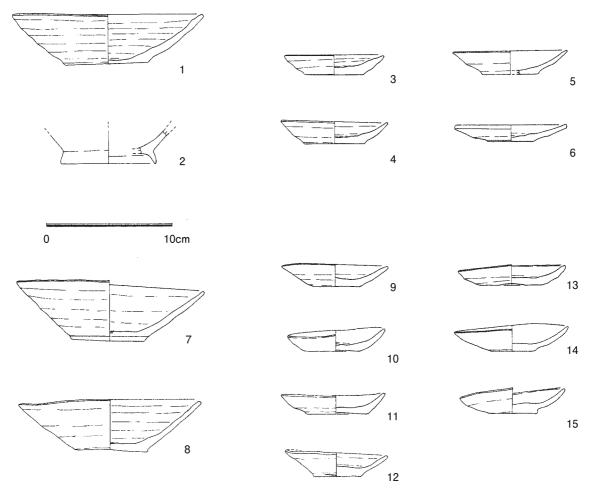
図中の 1、 $3\sim15$ はいずれも土師質土器の坏で大きさの大小はあるもののほぼ同様な手法で作られている。一部、磨滅により調整痕が判然としないものはあるもののロクロによる回転調整と底部の回転糸キリは共通している。2 は、黒色土器と考えられる土器の高台部分である。機種は不明だが復元底径 7.6cm を測り底部の 5分の 1程度が残存している。内面が黒色を呈しており約 1cm の高台が確認できた。

1、 $3\sim6$ は試掘調査時に検出したもので、 $7\sim15$ は本調査時に検出した固体である。1 は完形の坏で底径6.7cm、口径15.3cm、器高4.2cm を測る。全体に強めのロクロによる回転ナデにより調整されている。口縁部はほとんどまっすぐ立ち上がるがやや内湾気味にも見える。

3は全体の2分の1程度が残存している。口縁端部に欠損が見られ復元口径7.9cm、復元底径4.5cm、残存器高は1.6cmを測る。全体に強めの回転ナデを施し、回転糸キリ痕が確認できる。4は全体の2分の1程度が残存しており復元口径8.5cm、底径4.8cm。全体にゆがみがあり、器高は1.6~1.7cmを測る。やや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。底部の回転糸キリ痕がはっきり確認でき、全体を強めの回転ナデで調整している。5は、全体の8分の1程度が残存しており、復元口径9.1cm、復元底径4.4cm、器高1.9cmを測る。底部に回転糸キリの痕跡を見ることができる。6は、底部の3分の1、口縁部で4分の1程度が残存している。復元口径は8.8cm、復元底径3.9cm、器高は1.3cmを測る。全体に扁平な印章のもので器種は坏ではなく皿かもしれない。7は完形の固体で口径14.8cm、底径5.4cm、器高4.9cmを測る。全体にややゆがみが見える。ロクロによる回転ナデ、



第7図 遺物出土位置図(1/80)



第8図 出土遺物実測図(1/3)

底部の糸キリ痕も確認できる。8 はほぼ完形の固体で口径 14.5cm、底径 5.7cm、器高 4.2cm を測る。 全体的に丁寧な調整が見られるが若干のゆがみのある器形となっている底部から口縁部にかけて はほぼまっすぐ立ち上がる。9は口縁部の8分の1程度が欠損している。残存口径は8.5cm、底径 3.7cm、器高1.8cm を測る。全体に磨滅が大きくはっきりしない部分はあるが、底部には回転糸キ リと考えられる痕跡が見える。全体に回転ナデの痕跡も見える。10 は完形だが、全体にひずみが 大きく口径は最大8.1cm、最小部で7.8cm、機構も1.2~1.9cm を測る。やや内湾しながら立ち上 がる口縁部をもつ。内面は強い回転ナデの痕跡を見ることができる。11 も完形ながら大きくゆが み口径8.3cm、器高は $1.4 \sim 1.7$ cm を測る。端部に向かってやや内湾しながら立ち上がる口縁部と なっている全体に磨滅が見られるため、調整の痕跡は判然としない部分が大きいが、回転ナデによ る調整が行われている。12は口縁部の8分の1が欠損しており、口縁端部に欠損や磨耗が見られる。 口径は 8.3cm、器高は 2.2cm を測る。全体的に目網が大きく調整は判然としないが底部は回転糸キリ 痕を確認できる。全体にゆがみがあり口縁部は直線的に立ち上がる。13 は完形で口径8.6cm、器高1.7cm を測る。回転ナデと底部糸キリの痕跡を認めることができる。肉厚の口縁部がやや内湾しながら立ち上 がる。14 は口縁部の2分の1が欠損しており口径は9.1cmを測りやや内湾して立ち上がる口縁部を持つ。 底部はかろうじて糸キリ痕が見えるが、全体的に磨滅が大きい。15 は大きくゆがんでおり器高は 1.2cm ~21cm を測る。内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。磨滅のため調整は判然としない部分が多い。

第4章 まとめ

今回の調査では、遺構としては2条の溝状遺構と遺構面直上からの遺物のという成果を持って終了した。試掘調査時に想定された、ピット等の検出はなかったものの、この周辺に遺跡の広がりがあることは確認できた。遺物は、中世初頭(平安時代末から鎌倉時代初頭)の特徴を持つもので、遺構もこの時代のものと考えられる。本調査に当たっては、周知の遺跡としての本郷上口遺跡の一部という取り扱いの中で調査を行ったことは記述のとおりであるがこれまで知られていた本郷上口遺跡は散布地、須恵器を中心とした出土遺物が見られている。こうしたことから、この地域では古代から中世にかけての綿々とした人々の営みがあることは確認できたといえる。

しかし、検出できた遺構は2本の溝状遺構だけでありこの遺構についても性格が判然とせず自然 流路等の可能性も考えられることから遺跡全体の性格を決定付けるものとはならなかった。遺物を 伴った形での検出ということから、人為的なものと考えることもできるが、携帯電話基地局に伴う 調査という性格上、調査範囲が限られており、周囲にどのような広がりを持つかも判然としない。 このため、遺跡の性格についての判断は今後の調査例の増加にゆだねることとしていきたい。

休耕田とはいえ、水田耕作が行われていた場所で比較的良好な状態で遺構・遺物の検出があったことはひとつの成果ということができ、周辺に遺跡の広がりを持つことがわかったことでこの周辺の歴史を物語る史料としては一定の成果ということができる。特に、調査前から周知の遺跡として認識されていた丘陵部にかけての範囲には遺構があることがほぼ確実となり、おそらくその中には住居や建物跡、ピット等が含まれると考えられる。今後開発等により周辺の調査が進むことにより様相が明らかとなり、この遺跡の評価が出てくるものと考えている。今回の調査はその先鞭となったということをひとつの成果とし、今後の調査例の増加を待つこととし簡単であるがまとめとしておきたい。

【参考文献】

第5回山陰中世土器検討会資料集『山陰における中世前期の諸様相 - 伯耆出雲を中心として - 』 山陰中世土器検討会 2006

この資料のほか島根県教育庁文化財課・廣江耕史氏に異物についての多くの助言をいただいた。

写 真 図 版



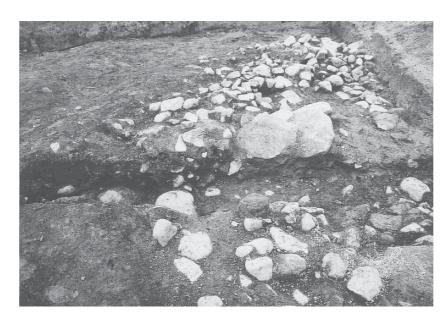
試掘調査完掘状況



完掘状況(南から)



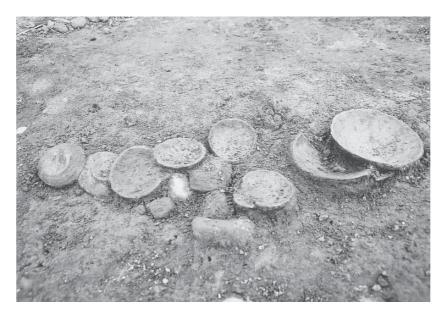
SD01・02 検出状況



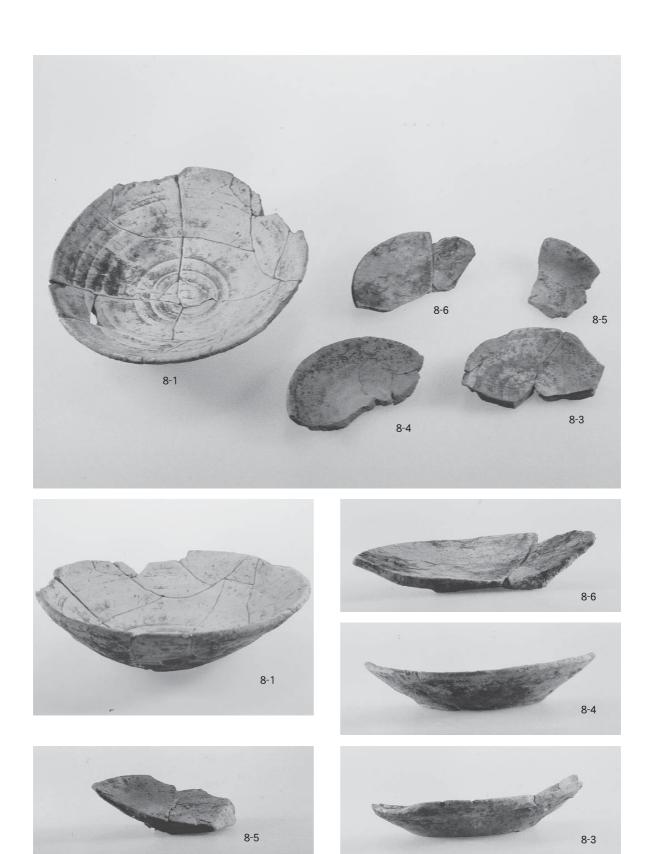
集石部状況



遺物出土状況



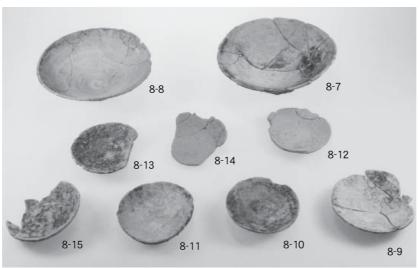
遺物出土状況

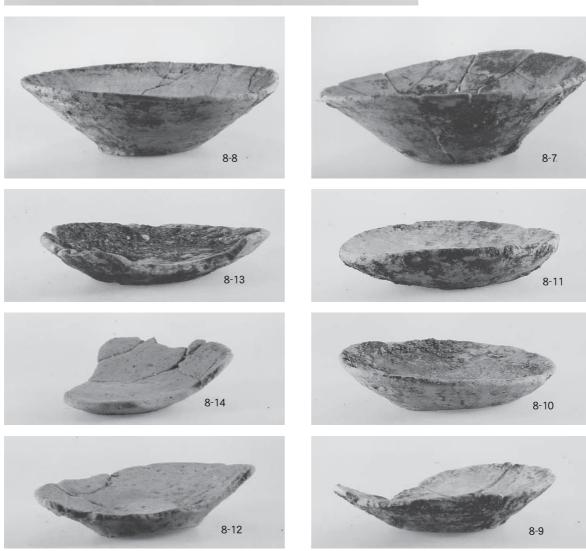






試掘調査出土遺物







報告書抄録

ふりがな	ほんごうかみぐちいせきはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	本郷上口遺跡発掘調査報告書								
シリーズ名・番号									
編集者名	大塚 充								
編集機関	安来市教育委員会								
所在地	〒 692-0207 島根県安来市伯太町東母里 580番地 151 0854-23-3316								
発行機関	株式会社NTTドコモ中国支社・安来市教育委員会								
発行年月日	2011年2月								
ふりがな	ふりがな コード 世界村						調査面積	調査年月日	
所収遺跡	所在地		市町村	寸	遺跡	座標	値	神红田恒	则"韭+*力口
ほんごうかみぐちいせき	安来市広瀬	質町	32206		6 C 54	X=-7197	8.	CO 2	2010年11月~
本郷上口遺跡	下山佐					Y=89023	8 60 m²		2010年12月
調査原因	NTTドコモ広瀬本郷基地局建設								
所収遺跡名	種別	主な時代			主な遺跡		主な遺物		特記事項
本郷上口遺跡	散布地	中世		溝状遺構 2		土師質土器			

本郷上口遺跡発掘調査報告書

NTTドコモ広瀬本郷基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年(2011年)2月発行

発行 安来市教育委員会

株式会社NTTドコモ中国支社

印刷 (有)太陽平版